

Title	世界大戦原因の研究(鹿島守之助著, 岩波書店刊行)
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.172- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かりであつて、(22cm×13.5cm)六四七頁、ギゾーとGasparrin夫人などの肖像畫、及び三通の手紙が寫眞版になつて掲載されており、吾々に一層の興味と親しみを感ぜしめる。(藤田寅一)

西洋史概説 (内藤智秀著)
教育研究會發行

人道主義を容れ、傳説を重んじ、社會的平和發展を目的とする民主主義を標榜する著者は此處にその歴史的智識を傾けて西洋文明を概説し、以てその世界國家建設の遠大な希望を謙讓な態度で披瀝してゐる。

先づ之を古代、中世、近世、現代の四篇に分ち、古代篇はローマまで、中世篇は北米合衆國の獨立まで、近世篇はフランス大革命に筆を起して世界大戦前に至るものであり、時代區劃の上からは何等特徴を見ないが、政治社會的變遷に重點を置いたその記述法は期せずしてペリクレス時代の描寫を分割させ、或はアレクサンドル大王時代の章にヘルシヤ戰役やペロポネス戰役を説く結果にまで及んでゐる。然しながら又他面に於てそれはギリシヤ、ローマの文物制度をそれぞれ巧みに包括し、比較的明瞭な印象を讀者に與へてくれる。著者の最も得意とする所は近東諸國の變遷にあり、従つてバルカン、トルコを中心とする蘊蓄を傾けて東方問題を論ぜらるるあたりが、斷然類書を凌ぎ、本書の最も優れた方面であらう。

最後に國際聯盟の新任務を説き、佛外相ブリアンの提唱したヨーロッパ聯盟にも言及し、黃禍論と白禍論を述べて大アジア主義の發生を論じ、民族主義による自己の立場を表明して結語とする。

全卷七七九頁の大冊、脱字、誤字、異説もないではないが、ともすれば不足勝な我等の西洋史に關する知識の理解と普及に對し資する所は決して少くはないであらう(近山金次)。

世界大戰原因の研究 (鹿島守之助著)
岩波書店刊行

大戰前の同盟條約の多くに『何等挑發に基かずして攻撃せられんとするとき』の句が含まれてゐる如く、戰爭にあたり、交戰國の何れが挑發せしかは問題となる所であり、交戰國何れも對手國の挑發により、やむなく應戰したものであると世界に認めさせんと努力するのである。一九一四年の世界大戰勃發の時にも英佛露獨逸等は外交文書を發表し、その對手國の非をならしたのである。この結果として、その後しばらくと云ふものは各國の學者、政治家は互に對手國のみに開戰の責任ある如くに論じたのであるが、漸次戰爭の興奮がさめるに従ひ、多くの學者は一方のみにその責任を歸することの非なることを見出し、その責任は兩方の側にあることを認め出したのである。鹿島氏も又この責任は兩方の側にて負ふべきものであるとの立場をもつて本書は書かれてゐるのであるが、然し結論に於て、ドイツロシヤの責任を比較された時にドイツ及びオーストリアがその和戰何れかを決する地位にあり、之を決する權限の存する所に最大の責任も亦存すると書かれてゐるので、全書を通じて、大體に於てドイツ側を非とした調子が見られるのである。

世界大戰の間接の主要原因として多く三國協商三國同盟の對立を云ふのであるが、即ち兩者の對立に責任ありとするのであるが、

鹿島氏も又この立場なので、第一篇間接原因に於てビスマルクの外交政策より發して三國協商三國同盟の對立にいたつた事情を三百頁を費して敍べられてゐるのである。そして年代的に云つて最初に原因としてあげられてゐるビスマルクの獨逸同盟の成立について論ぜられ、それが原因でないことを云はれてゐるのを初めとして、その後の大戦の原因として論ぜられてゐる問題（露佛同盟の成立、英獨協商の不調、獨逸同盟の攻撃的となりたること等）を一々とりあげ詳しく論ぜられ、次いで次の百頁をもつて戦争の直接の種子をまいた近東及びバルカン問題について論ぜられてゐる。フェルチナンド大公暗殺の原因となつたボスニヤ、ヘルツェゴビナの併合、ロシヤ、ドイツの近東、バルカン政策、ソマニ、フォンサンダー事件を論じ、バルカン戦争に於ける列強の地位を明にし、然して結論に於て、バルカン戦争が世界大戦を從來よりも一層可能ならしめ、この結果に不満なる國は、行動開始に充分強力なりと確信したら挑戦するであらうことは疑ひなく、然もコンスタンチノーブルに獨逸の二個の潮流が來り、バルカンに於てセルビヤの歸趨がヨーロッパの均勢を有利に傾けるものであると論ぜられ、この立場より壅塞關係を見なければならぬと結論されてゐる。

第二篇直接原因に於ては六百頁を費して六月二十八日のサラエヴォ暗殺事件より八月二十三日の日本の参戦にいたる約二ヶ月の歴史、及びその間のほとんどあらゆる問題をあげて本文に於て、或は小さな注に於て論ぜられて居る。八月一日前の數日間の外交は非常に複雑なものであるが鹿島氏はよくその各國の立場を

明にして説明されてゐる。なほ資料の缺けてゐるために論議の餘地がある所があるが、英佛に於ては資料が完全には發表出來ないのであるから止むを得ないであらう。

第一篇間接原因に書かれてゐる部分は從來我が國にも歐洲外交史として比較的多くの書を見出し得るのであるが第二篇の六月二十八日より大戦勃發にいたるまでの詳細なる歴史は原博士の遺稿世界大戦史を除いては殆んどなく、然も原博士の著は大正十二年の作であり、その後多くの外交文書等の資料の發表があつたのである。然るに日本に於てはその後外國に於ての名著が出てゐるに拘らず、然も著者の序文に於て云はれる如く、大戦に對して比較的冷靜に論ぜられる立場にあるに拘らず、雜誌等に於て一部について論ぜられたにすぎなかつたのである。それが今日ヴェルサイユ條約の改訂をもつてドイツの聯盟復歸となへられてゐる時に、この大戦前の外交問題を明にした書を得たことは洵に時機を得たもので、本書な氏の學位論文として提出せられたものゝ由で眞摯な研究であるから、戦前の外交史を研究するものにとつて必讀さるべき良書である。定價七圓（田中荆三）

江戸と大阪（幸田成友著）
（富山房發行）

幸田博士の日本經濟史研究が徳川時代の研究家特にその經濟史的研究家に與へたる貢獻は實に大なるものがあると思ふ。多くの經濟史的研究が近來公刊されてゐるが、同書はその緻密なる研究と、その大なる成果とに於て、到底此等と同一に論ぜらるべきものではなく、今まで不問に附せられ、又は、不明であつた多く